

サンマ漁の好漁を祈念

“店頭に並ぶと他の魚の売上が落ちる”と言われるほど人気が高く、サンマは秋の味覚の主役です。解禁当初のさんま棒受網の漁場は、例年、静岡から遠く離れた千島列島東方沖合の海域に形成されますが、静岡県西伊豆町からも大型船1隻がこの海域まで出漁します。西伊豆の漁港はかつて近海かつお竿釣り漁船の基地として栄えた歴史がありますが、さんま棒受網漁はかつお漁の副業として営まれていました。当業船は昭和40年代には70隻以上、平成初期にも20隻以上ありましたが、燃料等経費高騰、カツオ資源量減少、魚価低迷などの理由により年々減少しました。平成初期まで県水技研調査指導船も静岡県船団の一員として、千島から道東海域でさんま棒受網の試験操業を行い、それら情報を無線等により当業船に連絡をすることで支援を行っていました。

表層近くを遊泳する群れに夜間、投光器で照射すると、魚が一斉に海面上に跳躍します(跳群れ)。30年前の富士丸の調査時、その軌跡が高さ1m以上の円柱に見えるほど、反応の良い跳群れに遭遇し驚いた記憶があります。この正の走行性を利用して灯下に群を集め、揚網して漁獲するのが火光利用棒受網漁ですが、揚網1回でトン単位で漁獲でき効率が良かったため、日本国内ではTAC制度導入以前から資源持続的利用の観点から光量制限、漁期設定がされていました。近年、外国の大型船が時期を問わず公海上で漁獲することが問題視されています。日本主導で8か国・地域間の北太平洋漁業委員会が設置、2019年に加盟国全体の漁獲枠の上限規制が設けられましたが、さらに国別漁獲枠や隻数凍結、各国共通の光量制限導入も必要と考えられます。

今年7月に水産研究・教育機構から発表された長期漁海況予測では、今年の来遊量は昨年を下回り、9月中旬までの来遊量は極めて低調で、魚群は親潮第2分枝に沿って南下し、道東沿岸の第1分枝沿いではほとんど漁場が形成されないとされていました。季節が進み魚群の南下回遊とともに、道東、三陸沿岸で好漁場が形成されることを祈念していますが、日本沿岸・沖合に来遊する東経162度以西の資源量が近年、減少しているとのことです。

伊豆東岸の定置網にもサンマが入網します。棒受網で漁獲される魚に比べて脂は少ないのですが、丸干しに加工されます。今冬、伊東市でいるか追い込み漁が久々に再開される予定ですが、サンマがいるかを連れてくると言われており、関係者はその来遊を心待ちにしています。また、下田市白浜地区では押寿司風のさんま寿司が秋祭りやお祝いに欠かせない郷土料理です。棒受網船をはじめとした漁業関係者、飲食業者、住民、伊豆地域で生業を行い暮らす人々のサンマにかける想いを意識しながら、いただいた漁海況情報に目を通します。

(川合範明)